『人文学報』第117号（2021年５月）
（京都大学人文科学研究所）

小 特 集

京都における日仏交流史

―― 関西日仏学館と上海－京都ルート ――

京都大学人文科学研究所が 2014 年にスタートさせた「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」は，明治期以降，京都において，知の近代化がいかに進められ，いかなる道を辿ってきたのか，いいかえれば，欧米から輸入された思想や学問がいかにして「翻訳」され，それが近代以前の伝統的な知や文化にいかに接合されてきたのかを，東京とは異なる京都という地域の独自性を踏まえつつ，明らかにすることをめざす取り組みだ。

このプロジェクトは，「近代京都社会運動資料の整理・公開プロジェクト」や「京都大学美術資源の所在の予備的調査」をはじめとする７つのサブ・プロジェクトから成るが，そのうちのひとつ，「みやこの日欧文化・学術交流史」のミッションは，京都における日本とヨーロッパの文化交流の歴史，およびヨーロッパの学芸・思想の受容プロセスを再構成することにある。もっとも，毎年度けっして潤沢とはいいがたい予算をやりくりして進めざるをえないこの「みやこ」プロジェクトには自ずと限界があり，私たちのサブ・プロジェクトはこれまで，京都における日仏文化・学術交流の中心であるアンスティチュ・フランセ関西（旧・関西日仏学館）に的を絞り，その歴史資料の蒐集と電子アーカイヴ化に務めてきた。2019 年３月に京都大学人文科学研究所及びアンスティチュ・フランセ関西から刊行された小冊子，ミッシェル・ワッセルマン／立木康介編『京にフランスあり！ ―― アンスティチュ・フランセ関西の草創期』は，この資料コーパスから生まれた最初の成果だった。

続いて，2019 年秋に人文研創立 90 周年を記念してプログラムされた「人文研アカデミー」の連続セミナー「「みやこの学術資源」の継承と発信」の一環として，10 月 24 日，「京都における日仏交流史 ―― 関西日仏学館と上海-京都ルート」と題するセッションが催された。そこではまず，上記サブ・プロジェクトの主戦力として，これまで関西日仏学館歴史資料のコーパス構築に大いに貢献してきた京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程・藤野志織さん（2021 年度より人文研助教）が，自身の手で集めた資料を存分に「活用」して，関西日仏学館草創期の「女子教育」という新しいテーマを開拓してくれた。一方，私たちのサブ・プロジェクトには，いつしか強力で魅惑的な道連れが現れた。戦前の上海租界の研究に取り組む研究者チームである。その中心をなすおひとり，関西学院大学の趙怡先生が，この日のセッションの

もう一方のレクチャラーだった。趙先生は，まさに戦前の上海フランス租界と戦後の関西日仏学館を繋ぐ一級の文化人シャルル・グロボワの驚くべき足跡に焦点を合わせ，「京都における日仏交流史」という私たちのテーマが孕みうる広大な射程に目を向けさせてくださった。思えば，戦前のフランスはインドシナと上海と日本（東京／京都）からアジアを見ていた。私たちの歴史研究が，同時代のハノイや上海のフランス人社会の動向と無縁でいられるはずがない。本小特集は，これらの貴重なレクチャーの記録である。ただし，本小特集の原稿の締切は，セミナー開催から一年余り過ぎた時期だった。その間に新たに蒐集された情報を，趙怡先生は大いに取り入れてくださった。本小特集にはまた，資料として，両研究チームにとってのキー・パースンであるグロボワが，1931 年に中国アリアンス・フランセーズ代表として行った講演の，藤野志織さんによる抄訳も収録する。グロボワの文化的観察眼が一閃したようなこのテクストは，もちろん本邦初訳である。

（立木康介）